

資 料

健康福祉学科教育 5 か年の歩み ―学外実習を中心に―

1. 介護福祉士教育 5 か年の実践と評価

―「介護実習」の展開と介護系授業の編成から―

市川禮子¹⁾, 作山美智子, 庄子幸恵, 篠原真弓, 山野英伯, 無江季次

1. 介護福祉教育の視点

平成7年4月, 本学体育学部健康福祉学科として, 介護福祉士の養成課程が設けられ5か年を経過した。

本学の介護福祉専門職教育の発足は, 我が国の急速な高齢化と少子化現象, 及び生命・生活の質を重んじるQOLの姿勢, 障害者を別視しないノーマライゼーションの主張という時代の潮流に極めて合致するものであった。

また更に, 全国で第3番目という4年制大学での教育は, これまで社会の中で然るべき位置を得られなかった介護福祉という仕事の社会的評価をも高めるものであり, 4年制大学教育の意義は非常に大きいと考えられる。

初年度の特別養護老人ホーム(以下特養ホーム)等の施設実習では「4年制の大学生に介護の実習をどう指導すればよいのか」という施設指導者側からの思案が多く出されていた。

介護は制度化されて歴史も浅く, 学問としての体系も教授法も実習指導法も未確立であった。その援助方法は教育や資格を特定しない多様な人々の経験によって行われて来た。そこに昭和62年の介護福祉士の身分法制定により, その援助技術は主として看護職と社会福祉職から導入され, 現場での積みあげが為されて来ていると

ころであった。その状況下で我々教員も実習内容の一つひとつを指定規則と睨み合わせながら施設の指導者とともに練り上げていくという過程であった。

介護の業務は, 加齢や障害により自立生活が困難な人々の生活を直接の対象として関わるものである。特に高齢者はその一人ひとりが長い人生の歴史を持ち, 現在の自力生活に支障を来たしている人々である。

介護の専門職はこれらの人々に適切な介護の技術を提供できること。人間一人ひとりに対しての深い洞察力を持つこと。相対する人への謙虚な姿勢更に介護職としての豊かな感性が求められるものであると考える。

このことから本学で介護の授業を担当する者として, 介護教育の目標を次の三点に置いて来た。

まず第一に介護の実践の場では十分な判断力と技術力を持って介護の直接業務ができること。第二に将来社会に於いて, また介護実践の場において良きリーダーシップのとれる人材を育てる。第三に現在未構築の介護を, 現場に立脚した学問として科学していける研究者を育成するなどである。特に第二と第三は4年制大学という教育の中で, 介護系の専門教科に加えて整えられている体育学部という特色を持った多くの

1) 現山形県立保健医療大学教授

教科目によって醸成されていくものと期待した。 本学の授業の組み立ては表1のとおり、専門科目を軸にした学年における積み上げ方式としている。

2. 介護系授業と実習の構成

1年次で介護概論, 2年次で介護技術と介護
介護系の授業科目は指定規則に拠っているが, 実習Ⅰ(1段階), 3年次に介護技術Ⅱ, 形態別

表1 教育過程と履修年次

		1年	2年	3年	4年
基礎 科 目	教養科目	教習科目	教習演習		
		総合科目	人間学Ⅰ (ヒューマニズム等)	人間学Ⅱ (発育・発達等)	
		その他の 科 目	〈人文〉哲学・国文学・歴史学・心理学・美術・外国文学・国語表現論 〈社会〉社会学・経済学・法学・日本国憲法・地理学 〈自然〉物理学・化学・生物学・情報科学・地球科学 (選択必修科目)		
	外国語科目	英語基礎	英語〈基礎/購読/会話〉	英語〈購読/会話〉	英語〈購読/会話〉
スポーツ 科学科目	講義科目 実技科目	スポーツ社会学 スポーツ心理学 スポーツ計量学 運動生理学 体操 他16科目から3科目			
発展科目	講義科目	医学一般Ⅰ 介護概論 健康管理学概論 社会福祉論	医学一般Ⅱ 老年・障害者医学 リハビリテーション論 看護学概論 老人・障害者の心理 精神保健Ⅰ 老人福祉論 障害者福祉論		
	演習科目		介護技術Ⅰ 介護実習Ⅰ		
応用科目	学 科 選 択 科 目		栄養学概論 運動障害救急法 健康教育学 社会保障論 児童福祉論 社会福祉援助技術総論	生涯スポーツ論 障害者スポーツ論 レクリエーション指導法 運動処方論 精神保健Ⅱ 公的扶助論 地域福祉論 社会福祉援助技術演習 臨床心理学 家政学概論 障害形態別介護技術Ⅰ 介護技術Ⅱ 介護実習Ⅱ	健康福祉調査論 運動心理学 健康福祉行財政論 家政学実習 栄養・調理実習 障害形態別介護技術Ⅱ 介護実習指導 介護実習Ⅱ 卒業論文
	関 連 科 目	体育原理 スポーツ経営学 バイオメカニクス 生涯学習概論A	運動学 トレーニング基礎実技 レクリエーション実技Ⅱ エアロビックダンス 情報処理 生涯学習概論B	スポーツ栄養学 保健体育科教育 テーピング(理論・実技) 衛生・公衆衛生学A 軽スポーツ レクリエーション実技Ⅲ スポーツ行政学 体力学概論	社会教育計画B 社会教育演習B スポーツ医学概論 学校保健学A・B 情報処理 環境科学 社会教育計画A 社会教育演習A

介護技術Ⅰと介護実習Ⅱ(2段階)。4年次に形態別介護技術Ⅱ、介護実習Ⅱ(3段階)と「介護実習指導」としている。これに医学、福祉、家政、体育関係科目が介護系科目を強化する科目として配置されている。

このことから介護系学習の展開は、1年生で介護の概念を把握する。2年生で基礎的な介護技術と介護福祉現場(施設)の概要を理解する。3年生で介護専門職となるための基本的技術の修得と対象理解並びにかかわり技法(介護ケースを担当しその介護過程)を学ぶ。

4年生では、3年生の主題を継続しそれを深め、その上に対象の障害形態に応じた援助方法を学ぶ。更に学習の視野を対象者の生活・社会環境(施設・家族・地域社会)に広げ理解をすすめる。また学習方法としては、3年生までの学びを基盤にこれまでの講義を聞くという受け身の在り方から主体的能動的な学習方法を設定している。これは「介護実習指導」という教科目によって行う。通年の教科の中で小グループ編成で各自テーマを設定し、大学祭の場を用いて介護技術の指導体験をする。また指導教案を作成する。卒業を前に事例研究発表をする等、4か年の介護学習の統合即ち総仕上げを行なうというものである。

3. 介護実習の展開

介護実習は平成7年度入学の1期生が2年生

になった8年度から実施した。実習場は国の担当部局の指導により在宅介護はまだ指導体制が整っていないという理由により特養ホーム等の施設を中心にしたものである。

平成8年度から平成11年度までの実施状況のあらまは次表2のとおりである。

1) 実習の展開

実習の展開は実習Ⅰ(1段階、2年生)、実習Ⅱ(2段階、3年生と4年生)に分かれている。4年生については本学で実習Ⅱとして3年生と単位をまとめているが、指定規則に準じて4年生を3段階として区分している。

指定規則で実習時間は450時間と示されておりこれを3段階に分けて行なうこととされている。

本学では1段階を12日(90時間)、2段階を25日(200時間)3段階を20日(160時間)としている。

2) 実習内容

実習内容は表3のタイムテーブルに記したとおり、1段階では施設内で行われる介護の一般的理解。2段階で、指導者の指導のもとに基本となる介護技術の修得と、ケースを1例担当して、介護過程を学ぶ中核の実習とする。3段階では、夜勤実習も体験し対象者の全日を理解する。また2例目のケースを担当することと、学習の視点を個別のケースから介護単位、施設全般に広げたマネジメントの学習をする。更に在宅介護や地域関係機関との連携への広がりを

表2 年度別介護実習状況

年度	実習学年、学生数()内、施設数			計	
				学 生	施 設
平成 8 年	1 段階 2 年 (70人) 11ヶ所			70	11
9	2 年 (71) 14	2 段階 3 年 (41人) 12ヶ所		112	26
10	2 年 (73) 12	3 年 (41) 12	3 段階 4 年 (40人) 11ヶ所	154	35
11	2 年 (72) 12	3 年 (43) 13	4 年 (41) 11	156	36

注. 1段階は、介護福祉コースA、Bクラスと健康福祉コースCクラス全員必修
2段階、3段階はA、Bクラスのみ必修

表3 介護実習タイムテーブル

展開	学年	1年	2年	3年	4年
		導入	実習Ⅰ(第1段階)	実習Ⅱ(第2段階)	実習Ⅲ(第3段階)
学内授業		医学一般Ⅰ, 社会福祉論, 介護概論, 健康管理学概論	医学一般Ⅱ, 老人・障害者の心理, 介護実習Ⅰ, 精神保健Ⅰ, 老年・障害者医学, 介護技術Ⅰ, 障害者福祉論, 看護学概論, 老人福祉論, リハビリテーション論, 社会福祉援助技術総論, 健康教育学, 栄養学概論, 運動障害救急法, 児童福祉論	レクリエーション指導法, 家政学概論, 障害形態別介護技術Ⅰ, 介護実習Ⅱ, 社会福祉援助技術演習, 介護技術Ⅱ, 生涯スポーツ論, 障害者スポーツ論, 運動処方論, 臨床心理学, 精神保健Ⅱ, 公的扶助論, 地域福祉論	障害形態別介護技術Ⅱ, 家政学実習, 栄養・調理実習, 介護実習Ⅱ, 介護実習指導, 健康福祉調査論, 卒業論文, 運動心理学, 健康福祉行財政論
学生クラス		Aクラス, Bクラス, Cクラス	Aクラス, Bクラス, Cクラス	Aクラス, Bクラス	Aクラス, Bクラス
学習のねらい		学内講義において, 介護の目的, 関連する医療チームメンバーとの連絡調整, 協力方法, 介護技術の基本と方法を学ぶ。	1. 利用者との人間的ふれあいを通じて利用者の自覚におけるニーズと介護の機能を把握する。 2. 初歩的な日常生活の介護技術を学ぶ。 3. 介護施設と職員の一般的な役割について理解する。	1. 利用者個々のニーズ並びに障害レベルに応じて求められる介護の技術と適正な技術の用い方について学ぶ。 2. 利用者のニーズに基づく介護の計画と評価・記録について学ぶ。 3. 医療・看護との関連で独自の判断で行なってはならない仕事と連携の方法について学ぶ。	1. 施設運営・処遇全般について理解する。 2. 利用者のニーズに基づき一連の介護過程を展開する。 3. 施設並びに利用者の処遇背景として, 地域社会と在宅介護, 福祉サービスについて理解する。
実習フィールド		学内講義と演習	イ. 特別養護老人ホーム ロ. 身体障害者療護施設 ハ. 重症心身障害児施設	イ. 特別養護老人ホーム	イ. 特別養護老人ホーム ロ. 身体障害者療護施設 ハ. 重症心身障害児施設
実習時間		学内演習	90時間(9月に12日間) 1日8時間(3単位)	200時間(9月に25日間) 1日8時間(12単位)	160時間(5月~6月に20日間) 1日8時間夜勤実習も含む
グループ編成		8~9人 8グループ	2~4人でグループ編成	3~5人でグループ編成	1~5人でグループ編成
実習指導関係			1. 学内オリエンテーション 2. 現地オリエンテーション 3. 反省会 4. 課題レポート	1. 学内オリエンテーション 2. 現地オリエンテーション 3. 中間カンファレンス 4. 反省会 5. 課題レポート	1. 学内オリエンテーション 2. 現地オリエンテーション 3. 中間カンファレンス 4. フィールド実習指導 5. 実習総括・評価 6. 課題レポート

※ Aクラス, Bクラスは介護福祉士養成過程, Cクラスは健康運動指導者養成過程

意図している。学生にはⅠ、Ⅱ、Ⅲの各段階の実習終了後に研究レポートの提出を課し、各レポートは毎年の実習結果報告書の中に収録している（付、実習結果報告書リスト）。

3) 実習時期と施設の確保

実習時期の決定と実習施設の確保については非常に苦慮しているところである。

大学で定めている年間の授業、時間割とバッティングを避けるために、2年生と3年生の1段階と2段階の実習は、夏期休業中の8月末から9月に集中で組む。4年生の3段階は5～6月に集中実習として組んでいる。

実習施設の獲得については、県内の養成校間で持たれている数回の会議で調整され、実習施設と時期、学生配置数が決められる。

これを踏まえて更に各養成校が当該施設と打合せをし、学生の個人調書や健康診断書、記録類を整え学生の受け入れを依頼している。実習開始前に、教員が学生を引卒しての施設オリエンテーションはほとんどの実習施設で行われている。

4) 教員の巡回指導

実習中の教員による巡回指導は、介護福祉士等養成施設指導要領取扱い規則により週2回以上とされている。本学では最大26ヶ所（9月）の施設を4～5人の教員が分担し、各年度別報告書（本文 付記）に記したとおりの巡回を行って来た。

巡回の視点はイ. 実習現場の状況と指導者を知り、実習の流れをつかむ ロ. 実習学生の行動と適応状況を観察し把握する ハ. 学生の実習初期における不安定さを受けとめ指導する ニ. 状況に応じて実習の入り方、動き方、着眼点を示す ホ. 実習現場における学生の要望を聞き、実習内容に反映させる、他指導者からの指摘、学内授業との一貫性をはかるなど実習目的達成のための重要な意味を持っている。

5) 実習施設指導者との教育懇談会

平成8年、初年度の実習から毎年度末（1月中旬）に施設指導者との懇談会を持っている。

大学からは法人理事長と理事、学長、副学長、学科長、担当教員、事務局長と担当課長他、学生の実習に係わる立場の者が出席している。ここでは当該年度の学生の実習結果を報告し、施設指導者からの学生評価や意見をもらい、相互により充実した実習を行なうための話し合いがなされる。また次年度の実習の計画も諮り了承を得る。

6) 実習施設への学生配置

県内各地に広がる特養ホームへの学生配置は、遠い距離、非常に不便な交通手段、高い交通費と大変困難な問題を有している。

現在は、前記教育懇談会を経てかつ後期授業終了以前に、次年度の実習施設名を学生に示している。学生は各々が自分の希望施設を選び、重複した場合には教員の助言も入れて決定している。また3段階までの実習を出来るだけ異なる施設で体験するよう指導している。

4. 介護系授業科目と実習の統合

当然のことながら学内授業を施設実習に結びつけ、また施設実習での学びを学内授業に反映させて学生一人ひとりの学習を統合化するための工夫を試みて来た。その主なものを次に上げ、行なった一部の評価についても記す。

(1) 学内授業での介護事例検討と事例研究発表（3年生、4年生）

1) 3年生での事例検討

施設における2段階の介護実習でケースを1例担当し一連の介護過程を学習する。その担当ケースについてケースレポートを作成し学内授業で発表する。ここで学生一人ひとりに教員のコメントと学生間の質疑も行なう。

学生はケースをレポートとして改めてまとめることにより、担当したケースの観察や情報収集、問題の抽出や判断、計画立案や介護の実施について客観的に見直す。また自分が実施した介護の問題点の気づきを得る。その中で記録の

実際や介護計画の方法を学ぶ。

更に教員としてはクラス内で事例を発表し検討をすることは、学生が担当した1事例の学びをクラスメンバー40例の学習体験に広げることをも意図している。

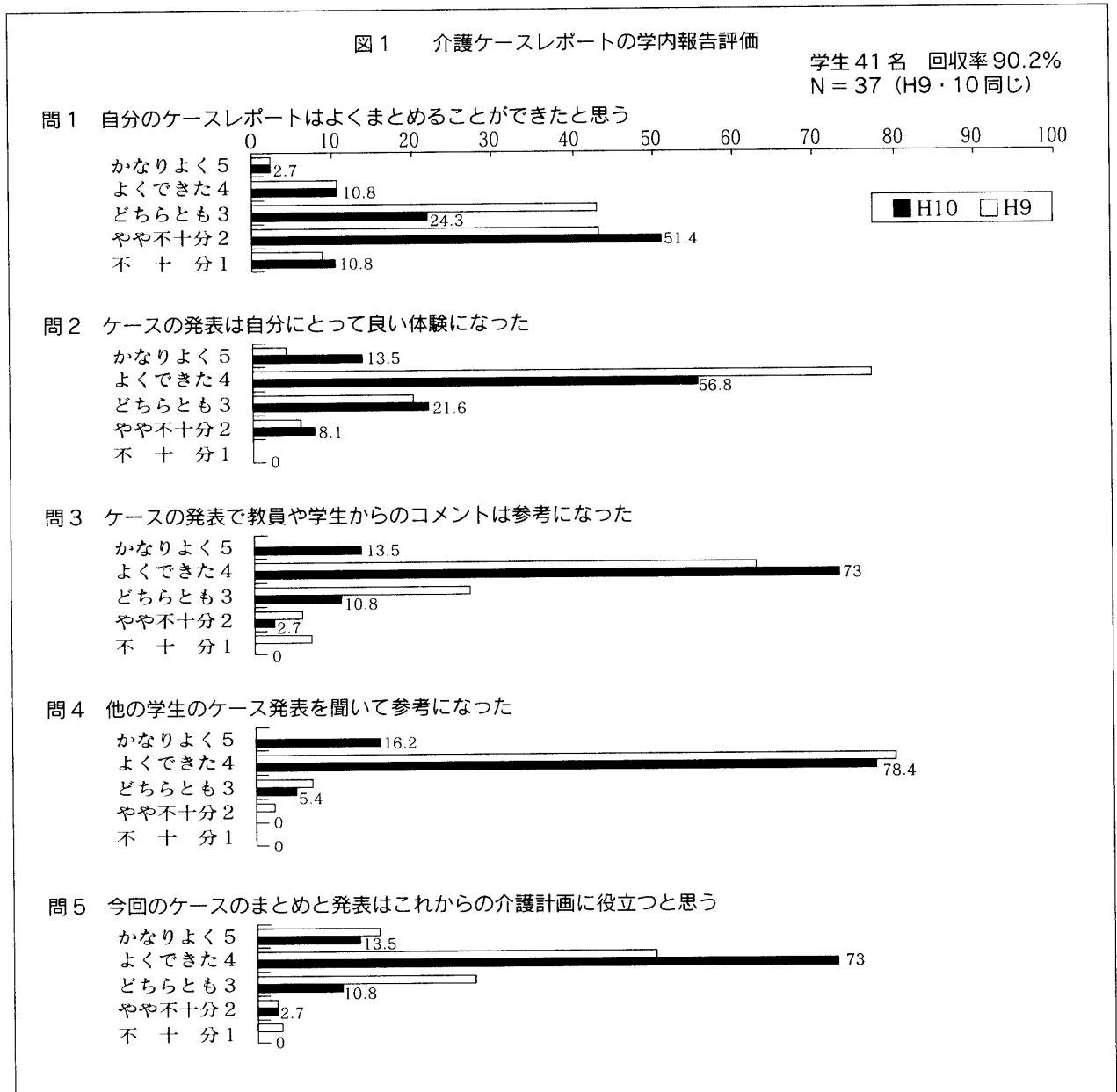
この検討会には授業と実習を担当した教員が全員参加し、それぞれの視点から詳細に的確なコメントを与えるスーパービジョンの機会ともなっている。

この授業評価については平成9年と10年に学生にアンケート調査をし図1にまとめた。

授業方法の設定としては学生に大きく支持されており、教員側への質的要求も含めて初回より2回目の調査ではよりプラスの評価となっている。このような授業の持ち方は諸に指導教員の力量によってその質が左右されるものであり、教員個々の資質を高めることが極めて重要であることを意識させられている。

2) 4年生の事例研究発表会

4学年の後半に他学年と学内教員に公開の形で事例研究発表の機会を設けている。10年度と11年度の2回実施した。



事例は 4 年生 (3 段階) の実習で担当したケースの研究レポートである。11 年度の研究発表会のプログラムは表 4 に示した。

ケースを課題傾向別にグルーピングをして示し、その中で学生達が主体的に発表事例を決め、司会進行のすべてを担当する。3 年生時のケー

表 4 平成 11 年度 学外介護実習事例研究発表会

日時：平成 11 年 12 月 16 日 (木) 10:30 ~ 14:20

場所：仙台大学 講義棟 (B 棟) B-103 教室

1. 日常生活および介護を中心とした事例グループ

* 2	96H003	内山 房	入所間もない方への援助について
* 1	96H004	押野 俊一	施設内における生活課題と生活行動の主体性への援助
	96H007	喜古 香織	全介助のケースへの援助
* 1	96H009	岸 弘泰	日常生活における活性化の支援
	96H011	北島 創	脳梗塞の後遺症のあるケースに対する援助
	96H012	後藤 満枝	失禁と筋力低下に対する援助
* 3	96H016	佐藤 昇也	残存機能の低下防止 (現状維持) と食生活の安定をはかる
	96H021	庄司 由佳	コミュニケーションを中心とした援助
	96H027	塙 文美	昼夜逆転のケースとのコミュニケーション
	96H028	原 美和子	危険を防ぐ援助 —施設入居者が安全に暮らしていくためには—
* 1	96H029	萬代 忠志	睡眠障害のある入居者の方に対する援助
	96H030	坂東 宏一	マッサージによる ADL 維持とその意味についての考察
	96H035	三浦 智之	介護実習レポート
	96H036	嶺岸 志穂	QOL 向上のための援助

2. 対象者の生活意欲・意識を中心とした事例グループ

	96H023	高崎 千恵	残存機能低下が見込まれるケースへの援助
* 1	96H034	堀田 剛弘	高齢者とのコミュニケーションと生きがいについての考察
	96H037	門馬 美佳	精神の安定を目指す介護とは
* 2.3	96H041	若松 達也	趣味づくりと生きがいについて

3. 痴呆を有する入居者への介護を中心視点としたグループ

	96H006	加藤 卓	痴呆の方の生活意欲向上と寝たきり防止
	96H008	木皿由里子	痴呆症の方に対する介護
* 2	96H013	斎藤 浩司	痴呆症のある高齢者に対する援助
* 1	96H025	田中 一成	痴呆性老人への援助
* 3	96H026	千葉 康弘	重度の痴呆があるケースへの援助
	96H032	福岡 知之	痴呆症状進行阻止のために
	96H033	星 みず江	痴呆性老人に対する援助
* 1	96H042	渡邊 順平	痴呆症を持つ利用者への理解と援助

4. 障害別・処遇困難などの入居者への介護を中心視点とした事例グループ

	96H005	片山 幸子	重症心身障害児に対する援助
* 2	96H010	喜嶋 典子	重症心身障害児 (者) に対する援助
	96H014	桜庭 達哉	重症心身障害児のケアについて
	96H018	澤田 敦	残存機能の低下防止と精神安定への働きかけ
	96H019	庄司 聡子	片麻痺を持つ高齢者の介護
	96H020	庄子 智美	重症心身障害児との関わり合いについて
* 1	96H024	高田 洋樹	精神不安定のあるケースへの取り組み
* 1	96H031	平澤 匡	精神分裂病の方に対する援助
	96H038	山内 恵介	重度摂食障害者についてのケア
	96H039	山上 政代	精神不安定なケースに対する介護について
* 3	96H040	山崎由紀子	精神障害のあるケースへの援助

注) * 1 演者 * 2 司会者 * 3 タイムキーパー

ス検討に次いで2回目の学習であるが, 内容, 発表について相応の成長が認められている。特にこの発表会では介護系以外の各教科の先生方の参加と助言も受けることができ, 学生達にとって最終の貴重な示唆を得られる場となっている。

(2) 地域・生活の場での車椅子体験

3年生時に「車椅子ウォッチング」と称して大学構内と柴田町内のバリアフリー環境を調査探訪をする学習をしている。

小グループを編成し, 身体障害状態を仮定し, ウォッチングの範囲を定め, 障害者, 介助者の役割や記録・運営の分担をする。

学生は2段階の施設実習を経ており, そこでは入居者の障害状態と安全性を配慮して整備された施設内介護を体験している。しかし健全者である自分が生活している日常生活の場で障害を設定しての擬似体験ははじめてであり, 学生に多くのことを学ばせている。

街の歩道の狭さ, 傾斜, 顔前を走り抜ける車のスピード, 車椅子の車輪が嵌ってしまう沢山の隙間, 回転できない店の中, 手の届かないカウンター, 介助者の介護技術の良否など。身近な生活環境だけを取りあげても福祉の地域環境づくりは“これから”という気付きを学生達は持ち帰っている。

グループでの擬似体験後クラスで発表をし, グループごとの報告をまとめている。このことについては, いずれ大学と地元町に学習結果資料を提供しバリアフリーの環境づくりの一助としたいと考えている。

(3) 4年生の「介護実習指導」

通年4単位で組まれている演習の科目である。科目のねらいは, 介護関連教科目と介護実習を基盤として将来の介護福祉専門職として, また指導者としての総合能力を養うことを目的にしている。

教科の展開は4年生までの各教科と実習を総合しその上に自分で考え実際に試み, 自己の中

に具体的な介護のイメージをつくり, 更にそれを他者に伝えられる力を養うことを目指している。そのために学習のフィールドとして, (イ) リハビリテーション医学の最前線の間 (東北大学医学部附属病院リハビリテーション部 (ロ) 一般市民を対象に行なわれている介護指導の実際の間 (仙台市介護研修センター) (ハ) 地域の在宅介護の間 (柴田町槻木高齢者・障害者への世話付住宅) を準備した。

(イ)ではリハビリテーションの考え方を学ぶ(ロ)では市民を対象に開かれている講座に参加して指導者の指導方法について学ぶ。(ハ)ではケア付住宅で生活している障害者の介護をその人のニーズに基づいて実施するというポイントである。

そして学内では, 学生のフィールドへの参加体験をフルに生かしてグループワークにより創造的, 主体的に学習を進めるものとした。

グループは7~8人の小人数編成とし, リーダーなどグループ運営の役割を決める。そして, 学生個人の「介護実習指導案」レポートテーマを決め, かつ大学祭の間で発表体験をするグループテーマを決める。

学生はフィールド学習への参加, 実習室での技術演習, グループ討議, 教員のコメント, 文献学習などの方法で主体的に計画を組み学習をすすめる。このグループワークにより個人の役割認識やメンバー間の相互作用を体験し自己啓発をする。グループダイナミクスによる教育効果をも期待している。

この「介護実習指導」教科は表5の展開とした。また学生に課した介護実習指導案は表6のモデルを作って示した。大学祭時のグループ発表は平成11年度については表7の内容である。更に「介護実習指導案」のレポートは別冊報告書(本文, 付記)にまとめた。

この教科を実施しての評価としては, 大学で依頼したフィールドからの協力は非常に良好であった。しかし, 学生が学習の主体となり自分のテーマを設定し, 自主学習や仲間とともに共

通の課題に向かって一つのを創りあげていくというグループ学習は大変不慣れであった。

また、教員側の稼働力と力量不足もあり演習形式の授業の展開は非常に難しいものであったと考えている。

しかし4年生時に介護学習の総まとめとして行なっている演習形式のこの学習は、授業終了後の学生の感想などから卒業後に現場業務で当面する様々な課題や困難性を切り開き乗り越えていくための原体験となるものと考えている。

(4) 介護実習及び介護実習指導報告書の作成

介護実習初年度である、平成8年度実習Iから毎年、学年と実習段階別に実習結果報告書を作成して来た。平成11年度で全10冊となった。(付記、介護実習・介護実習指導結果報告書リスト他)

冊子の内容は(イ)段階別に行なわれている介護実習の概要(学生数と実習配置、教員の巡回状況とその視点、学生へのオリエンテーション内容、実習評価、実習上の課題等)(ロ)学生の実習での学びと体験した技術、(ハ)学生全員のテーマレポート(ニ)実習計画の全様(タイムテーブル)と実習受け入れ施設とその配置学

表5 介護実習指導の展開

教科目のねらい

介護福祉専門職、又は指導者としての総合対応能力を習得する。そのため、フィールドにおける訓練と学内での個人並びにグループによる主体的、計画的学習をすすめるものである。

期間

4月～3月 但しフィールド活用については別記

学習フィールド

④ 学内	③ 槻木 ケアステーション ケア付住宅	② 仙台市 介護研修センター	① 東北大学 リハビリテーション部
① 個人・グループでC, B, Aでの学習を取り込み、各テーマにそって介護の実習指導案を構築する。 ② 指導案様式、別紙 ③ グループ発表 大学祭時(11月) ④ 個人テーマ報告 指導案様式による	① 居宅における介護の技術 ② 地域ケア マネージメント	① 介護指導の技術	① リハビリテーションの臨床

授業回数

30回

A, B, C 他は学内演習、必要に応じて、関連講義、連絡を行う。

5回(5月～11月) 3回(5月～11月) 1回(5月～7月)

回数は最低基準、個人の必要に即して出向くこと可能

成果

- ① グループ発表(大学祭の場合)
- ② 個人報告「介護実習指導」指導案
- ③ 本学4ヶ年の介護に関する学習の総括並びに集大成とする。

評価

通年 4単位

生氏名である。

この報告書は、毎年実施した介護実習実施状況の大方を盛り込んでおり、年度ごとの状況を記録として保存し、実習全体の評価をし、次年度以降の実習指導計画の資料として活用しているものである。

更にもう一点は、毎年段階別に課している学生の個人レポート等を経年的に見ることにより、実習と学内授業における教育的関わりによる学生の成長や教育上の課題等を把握する教育研究資料にもなると考えている。このことについてはまだ未着手であるが、今後介護福祉教育を充

実させていくための研究資料として活用していきたい。

5. さいごに

年度末急遽課題を与えられ、5ヶ年の介護系教育概要のまとめを行なった。荒いまとめになったことの責は市川が負うところであるが、授業と実習の展開は毎月定例の打合せを持つなどをして作山講師、庄子、篠原、山野助手との良好なチームワークで進めたものである。

また当初から設置された健康福祉学科担当の

表6 「介護実習指導」指導案

「介護実習指導」指導案

指導者：学籍番号 氏名

1. 主題
2. 日時
3. 対象
 - 1) 人数
 - 2) 性別
 - 3) 年代
 - 4) グループ特性
4. 指導方針
5. 指導計画と指導過程

段階	項目	時間	説明内容 (ポイント中心に箇条書き)	指導上の留意点 教材等

6. 指導案作成についての自己評価

庶務部門、高橋、石渡氏の協力、更に朴沢副学長（現客員教授）他教員の方々の大きな指導とバックアップがあつて開講から 5 年間の積み上げをすることができた。

10 年度と 11 年度に 2 回の卒業生を世に送り出した訳であるが、学生たちには一般教養などの基礎科目、発展科目と応用科目、と 4 年制大学ならではの充実した教育がなされている。

更に体育学部としての健康に視点を当てた教育の特色がある。学生たちが介護福祉専門職として真摯に現場業務に取り組み、対象から学ぶ姿勢を基本に前進してほしいと願っている。

また今後、現場で課題を抱える卒業生等のために、更に介護を学問として体系化させていくために本学大学院に健康福祉を専攻する分野が設けられ介護教育、研究に当る人材が育成されることが望まれる。

今回、介護系の教育と実習 5 年間の実践をまとめ、本学における介護福祉士教育の足跡の一端を記す機会を与えていただいたことについて担当教員の一人として、糸野学長はじめ編集委員の方々に心から感謝を申しあげるものである。

表 7 大学祭における発表プログラム

体験しよう 身近な介護		
日時：1999 年 10 月 31 日(日) 9:30 ~		
場所：専門研究棟 (C 棟) 介護実習室		
〈 プ ロ グ ラ ム 〉		
時 間	テ ー マ : 発 表 内 容	(グループ)
9:30 ~ 10:15	視覚障害者の介護について : 視覚障害者の日常生活に関する基本的な介護技術に関して、実体験を通して見につけよう!	(C-2)
10:15 ~ 11:00	初心者のための排泄介助 : 日常生活行動の一つである〈排泄〉についての介助方法を、分かりやすく簡単に学ぼう!	(A-2)
11:00 ~ 11:45	視覚障害とは? : みなさんは「視覚障害」についてどのくらい知っていますか? 視覚障害を持つ方と接するとき大切なことを、みなさんで学んでみましょう。	(C-1)
11:45 ~ 12:30	初心者のための車椅子講座 : 介護用具(自助具)としても最ポピュラーな〈車椅子〉について、実体験を通してより良く知って見よう!	(D-1)
12:30 ~ 13:15	障害に応じた歩行介助 : 障害に応じた歩行器具の選び方、介助の仕方を実体験を通して身につけよう!	(D-2)
13:15 ~ 14:00	歩行補助具の安全な操作 : 車椅子をはじめとした様々な歩行補助具の使用方法を学び、実際に体験してみよう!	(A-1)
14:00 ~ 15:30	半身麻痺者の衣服の着脱方法について : 介護する立場、される立場を実際に体験してみよう!そこで、あなたはどんなことを感じるでしょうか?	(B)

〈付 記〉

◆介護実習, 介護実習指導 結果報告書リスト

1. 平成8年度 介護実習Ⅰ 実習結果報告書 88
頁 健康福祉学科
2. 平成9年度 介護実習Ⅰ 実習結果報告書(第
1段階実習 2年生) 86頁 同上
3. 平成9年度 介護実習Ⅱ 実習結果報告書(第
2段階実習 3年生) 104頁 同上
4. 平成10年度 介護実習Ⅰ 実習結果報告書(第
1段階実習 2年生) 86頁 同上
5. 平成10年度 介護実習Ⅱ 実習結果報告書(第
2段階実習 3年生) 102頁 同上
6. 平成10年度 介護実習Ⅱ 実習結果報告書(第
3段階実習 4年生) 99頁 同上
7. 平成10年度 「介護実習指導」結果報告書(4年
生) 106頁 同上
8. 平成11年度 介護実習Ⅰ 実習結果報告書(第
1段階実習 2年生) 84頁 同上
9. 平成11年度 介護実習Ⅱ 実習結果報告書(第
2段階実習 3年生) 101頁 同上
10. 平成11年度 介護実習Ⅱ(第3段階) 介護実
習指導 4年生結果報告書 187頁 同上

◆学会発表 学術雑誌投稿等リスト

- 実習における介護ケースレポートを取り入れた授
業の試み(市川禮子, 作山美智子, 庄子幸恵, 篠原
真弓, 山野英伯) 第4回日本介護福祉教育学会
於: 弘前市 1997.2.
- 4年制大学における介護実習の展開~カリキュラ
ムと介護実習の構成から~(市川禮子, 作山美智子,
庄子幸恵, 篠原真弓, 山野英伯) 第5回日本介護
福祉教育学会 於: 白浜町 1998.2.
- 実習における介護ケースレポートを取り入れた授
業の試み(市川禮子, 作山美智子, 庄子幸恵, 篠原
真弓, 山野英伯) 介護福祉教育 No.7 pp.18-21
(1999.3) 中央法規出版
- 実習と学内授業に関する展開~介護教育の現場か
ら~(市川禮子) 公衆衛生情報みやぎ No.270.
pp.7-12 (1999.6) 宮城県公衆衛生協会

◆介護(看護)系授業並びに実習担当教員

健康福祉学科	講師	市川 禮子
	講師	作山美智子
	助手	庄子 幸恵
	助手	篠原 真弓
	助手	山野 英伯